

# W・C・ミッチェルのリカード論

佐々野 謙 治

は し が き

I. リカードの『原理』の背景

——彼の生涯と業績

(以上本号)

II. リカードの『原理』の検討

あ と が き

は し が き

私は、先の小稿で次のように述べた。「後世云々される経済学の理論を構築した偉大な経済学者達の中で、学史的な研究（過去の経済学の批判的研究）を行い、しかるべく学史の著作を公けにしている人は、決して少なくない。思うに、自らの理論を構築する過程において、人は学史的な研究の必要に迫られるのであろう。自らの理論を構築しえた人は人で、その理論をしかるべく位置づけようとして、あるいは自らの理論の到達点を示そうとして、学史の著作を公けにするのであろう。とすれば、こうして公けにされた著作を検討してみることは、その人の理論を解明していく上での大きな手助けとなるはずである。その人の構築しえた経済学の理論をポジとすれば、ネガに相当するのが、その人のなしえた学史的な研究だ、とも言えるからだ。ところで、ミッチェル (Wesley C. Mitchell, 1874-1948) もまた、多くのエネルギーを学史的な研究に注ぎ、かなりの頁数を有する学史の著作を公けにしているのである。『経済理論の諸類型——重商主義から制度主義まで』(Types of Economic Thought——From Mercantilism to Institutionalism) というのがそれである。やはりミッチェルも、自らの立場を学史的な研究を通じて位置づけし、今後の経済学の進むべき方向を

示そうとしたのではないか。

とまれ、これからしばらく私は、ミッチェルの上述の学史の著作に展開された経済学批判の主要論点を整理・検討していく予定である。また、そのことを通じて私は、その批判の論点の背後にあると解されるミッチェル自身の積極的主張を浮き彫りにしていきたい。とはいえ、ミッチェルの学史の著作の中に出てくる経済学者の数は多い。従って、そのすべてを取り上げて整理・検討することは困難だし、またその必要もないであろう。上述した私の課題——ミッチェルの経済学批判の主要論点を整理・検討することを通じて、ミッチェル自身の積極的主張を浮き彫りにするという私の課題——に関する限り、そうである。しかし、そうだとしても、ミッチェルの学史の著作の中に出てくる多くの経済学者達の中から、一体誰を代表的なものとして取り上げて整理・検討したらよいのか。やはり、それなりの目安ないし基準といったものが必要であろう。かくしてここに、ミッチェルの学史研究全体に関する諸見解を概観・整理することが必要になってくるであろう<sup>1)</sup>。

こうして私は、先の小稿で、その概観・整理を試みたのである。かくしてそこから導き出された結論は、こうであった。すなわち、「ミッチェルの経済学批判の対象として欠くことのできない重要な人とは、リカード (David Ricardo) とベンサム (Jeremy Bentham) とヴェブレン (Thorstein Veblen) の三人だ、と言ってよいであろう。従ってまた、ミッチェルの過去の経済学に対する批判の論点を整理・検討することを通じて、彼の積極的主張を浮き彫りにしようとするれば、少くともその三人に対するミッチェルの批判の論点を整理・検討することが必要だ、と言えるであろう<sup>2)</sup>。実は、ここにいうその三人の中のリカードを取り上げたのが、この小稿なのである。

<注>

1) 佐々野謙治「W・C・ミッチェルの経済学批判——その序説的考察」『第一経大論集』第14巻第2号、1-2頁

2) 上掲論文、21頁

## I. リカード『原理』の背景

### ——彼の生涯と業績

リカードに関するミッチェルの論述は、内容的には二つに大別してなされている、と言ってよい。すなわち、リカードの伝記的叙述がその前半部分でなされ、リカードの著書・『経済学および課税の原理』(Principles of Political Economy and Taxation)——以下すべて『原理』と略記する——の要約・検討がその後半部分でなされている。従って小稿も二節に分けて、その前半部分の概要をたどることから始めたい。

さて、ミッチェルは言う。「リカードと彼の仲間が19世紀の最初の4半世紀に展開した新しい経済学は、概してスミス (Adam Smith) の著作に基づいていた。古典派経済学者達は、彼らの学科の歴史については、さほど多くの関心をもたなかった。彼らには、この分野での過去の思想について知られる必要のあるものは、そのほとんどのものが、『国富論』(Welth of Nations) によって要約されているかのように思われたのである。彼らは、重商主義者のみならず重農主義者も、すでにスミスが明示していたように、基本的な誤謬によって損われた著述をした人々である、と考えた」<sup>1)</sup>。とはいえ、彼らはまた、スミスの学説の多くに対しても批判的であった。ヤング (Arthur Yong) やベンサム、マルサス (T. R. Malthus)、セー (J. B. Say) 等がそうである。彼らはスミスの著作に基づきながらも、それに批判的な経済学を展開したのであった。なお、『国富論』については各種の版が出され、その編者達は、スミスの学説を近代的なものにしようと努めたのであった。「しかし、そうした『国富論』の細部の修正は、新しい類型の経済学を生み出しはしなかった。それには、何かもっとはるかに根本的なことが必要であった。すなわち、イギリスの経済思想に新しい類型の経済学が生み出されたのは、経済学者達が新しい問題に彼らの関心を集中したからであった。経済学者達が彼らの関心をそこに集中したこの新しい問題は、社会生活の変化によってもたらされた。私達は……スミスとは別の方向に人々の注意を転じた当時の社会生活の変化とは何であったかを見てみよ

う」<sup>2)</sup>。

かく言うミッチェルは、その社会生活の変化や、この変化によってもたらされた新しい問題への言及を、彼のリカードに関する伝記的叙述の中のしかるべき箇所で行っているのである。というのも、実はここにいう新しい問題と取り組み、スミス以来の生産を中心的な問題にした経済学に代る新しい「類型」の経済学を生み出した中心人物、それが他ならぬリカードだ、と解されるからなのである。単にそれだけではない。同じくミッチェルによれば、その経済学・『原理』をもってリカードは、以後60年から80年も続いたイギリスの古典・新古典派経済学に、一種の枠組を与えたのであった<sup>3)</sup>。とまれ以下、ミッチェルが試みているリカードの伝記的叙述に関する部分の概要を見ていきたい。

リカードは、オランダからロンドンに移住したユダヤ人家族の一子息として、1772年4月18日に生れた。彼の父は、ロンドンに商品売買・仲買人の店を開いたが、やがてその商品の売買から離れて、手形や公債等の売買を専門とするようになった。この父の商売にリカードは、はやくも14才の時に身を投じることになった。従って彼の受けた学校教育は、極めて短く限られたものであった。代りに彼は父の店で、その商売に必要とされる綿密な計算や判断をする訓練を、みっちりと受けることになった。やがて、この彼の人生に一大変化をもたらす出来事が起った。それは、キリスト教徒であるクエーカーの娘との彼の恋愛であった。彼の父母のような正統派ユダヤ人の立場からすれば、家族の一員が誰であれ異教徒の娘と結婚することなど、決して許されないことであった。若いリカードは今や、彼の愛した娘と家の信仰・商売のいずれかを選ばなければならない、という苦境に立たされた。彼は勇敢にも、自分の愛した娘と結婚するという道を選んだ。彼は、家族が信仰していたユダヤ教を捨てて、父の店を出た。そして彼は、ほんのわずかの資本をもって、彼自身の商売・株式仲買人としての仕事を始めた。時に21才という若さであった。しかし彼には、友人達の手助けと支持があったし、何よりも商売の才覚があった。当初の小資本にもかかわらず、彼の株式仲買人としての歩みは順調であった。26才にならないうちに彼は、すでに経済的に独立できるほどの成功をおさめたのである<sup>4)</sup>。

かくして翌年の1799年から1809年に至るリカードの10年間は、彼が経済界において活躍し、個人的にも相当な富を築いた時であった。彼は単なる株式仲買人にとどまったのではなく、政府公債の引受人の一人ともなり、金融界の大立物になった。他方この10年間はまた、彼が経済学者としてレビューし、種々の著作活動をする1809年から1819年に至る10年間を準備した時でもあった。

リカードは当初、経済的なゆとりから生れた余暇を、数学や化学、鉱物学等を学ぶことに当てていた。それが、1799年に彼の妻の健康のためバースに滞在した時、偶然にも彼は、彼の知的関心を経済学に向けさせることになった書物と出会った。スミスの『国富論』がそれであった。彼は興奮とまでは言えないにしても、ともかく最大の関心をもってそれを読んだのである。以後彼の余暇の大半は、経済学関係の読書に当てられることになった。彼は『国富論』につぐ強い関心をもって、マルサスの『人口論』(An Essays on the Principle of Population)を読んだ。また彼は、経済学に関する専門論文の掲載紙・『エデンバラ・レビュー』が創刊されるや、その定期的な愛読者となった<sup>5)</sup>。この間、彼はまたミル (James Mill) と出会う機会にも恵まれた。

当時のミルといえば、ナポレオン戦争中のイギリスで、スペンス (Willam Spence) と一種の経済論争を展開していた。スペンスは、『商業無用論』(Britain Independent of Commerce, 1807) という小冊子を公けにし、ナポレオンの大陸封鎖令・商業遮断政策がイギリスをさほど痛みつけることはないだろう、と主張した。富の源泉をなすのは農業のみであるから、というのがその理由であった。このスペンスにミルは『商業擁護論』(Commerce Defended, 1808) をもって応じた。これは、農業のみを富の源泉として重視し、商業や工業を軽視するスペンスの重農主義の理論を、打破しようとするものであった。ミルのこの小冊子をリカードは例によって熱心に読んだのである。単にそれだけではなく、彼はミルと面会した<sup>6)</sup>。以後彼がミルともつに至った親しい交りは、彼の生涯に大きな影響を及ぼすことになった。

「ミルは当時、哲学的急進派として知られるようになった小集団の中心人物ベンサムの最も親しい友人であり、仲間であった。ミルは彼の新しい友人リカ

ードを直ちにベンサムに紹介した。しかし、ベンサムとリカードは極めて親密といえるほどの仲にはならなかったようである。もっとも彼らはリカードが死ぬまでお互い親しい間柄にはあったのだが……政治においてはリカードは、自らをベンサムの一弟子として常に認めていた。それでも彼が知的にどれ位ベンサムに負うていたかを言うことは困難である。(原文改行)しかし、彼がミルに負うところは大きかった。リカードに考えを示唆したとまでは言えないが、ミルは、議論を展開かつ提示する論理的方法の偉大な訓練者であり、生来の教師であった。リカードは彼の書いたものを批判を求めてミルに送るのが常であった。リカードがともかく最終的には彼の考えを明りょうな形で述べることができたというような成功の大部分は、ミルがリカードのためになしたところのものに帰されるであろう。というのも、リカードは生涯、学校教育を十分に受けなかったことからくるハンデキャップに、常々悩んでいたからである……彼は手紙以上のこみいった種の議論に対しては、それを秩序立てて述べる技量に欠けていると感じていた。実際友人ミルの切なる勧めがなかったとしたら、リカードが果して著述家かなるものになりえていたか否か、疑わしいのである」<sup>7)</sup>。

ところで、リカードの経済学者としてのスタートは、彼が1809年8月29日、モーニング・クロニクルに「金の価格」(On the Price Gold)という無署名原稿を寄稿したことによって切られた。いわゆる「地金論争」への彼の参加である。当時イギリスでは、地金の高価・銀行券の低下という問題に直面していた。1793年に始まったナポレオン戦争は、戦費調達のためから大幅にインフレーションを促進した。また当時の戦費は、主として公債(先にも述べたがリカードはこの公債引受人の一人となった)によってまかなわれていたから、多額の公債発行による通貨価値の下落は、いかにも避けがたい成行きであった。それに、海外派遣軍や同盟軍のための海外送金と穀物輸入代金の決済等も、巨額の金の流出をもたらした。その結果、イングランド銀行の金準備金が激減し、1797年には金兌換の停止をよぎなくされるに至った。こうして不換銀行券の国となったイギリスでは、金地金とイングランド銀行券との間に価格差が生じた。とりわけ、1808-11年頃には、その価格差が大きくなった。かくしてここに、

その原因求明とその対策を求めて、一種の経済論争が引き起こされた。それが、いわゆる「地金論争」であった。この論争に見られた主張の多くは、イングランド銀行券が下落したのではなくて地金価格が騰貴したのである、というものであった。リカードは、その主張を打破すべく上述の原稿を書き、これをモーニング・クロニクルに寄稿したのであった<sup>8)</sup>。

その原稿・「金の価格」は、反論を呼びし、これに対してリカードは二回の解答をもって応じた。こうして彼は、モーニング・クロニクルに計三つの寄稿をしたのである。今やそれを取りまとめてはという説得に促されて、彼は、1810年1月に小冊子を公けにした。これが『地金の高価格、銀行券の減価の証拠』(The High Price of Bullion, A Proof of the Depreciation of Bank Notes)——以下すべて『地金論』と略記する——であった。この小冊子におけるリカードの見解は、要するにこうであった。すなわち、地金の高価・銀行券の低価の唯一の原因は、イングランド銀行による不換紙幣の増発にある。この不換紙幣の増発が銀行券の価格を低落させているのであって、地金の価格が騰貴しているのではない。しかし、利潤追求のための私的機関に他ならないイングランド銀行自らが、その増発を抑制することはないであろう。となれば、この唯一の救済策は、銀行券に対する金兌換を再開する以外にない、というものであった。なお、この小冊子におけるリカードの問題接近ないし論述の方法は、すぐれて理論的なものであった。すなわち、彼は「国際間における貴金属の分配規制の法則」という一般理論をもって議論を始めているのである。実際人としてリカードは事実をよく知っていた人であったが、彼が議論の過程で示した事実は極めて少なかった。彼は、自らが議論の出発点とした法則を証明することなく、単にその働きを説明しているのである<sup>9)</sup>。

とまれ、直ちに四版までも刷られたリカードのその『地金論』が与えた影響は、実に大きかった。当時、議会においてホーナー (Horner) が通貨問題を研究調査すべき委員会の設立を提議したのも、その影響を受けてのことであった。かくして設立されたその委員会が、1810年に公けにした『地金委員会報告』(Bullion Reports)——以下すべて『報告』と略記する——も、リカードの

先述した見解にそってなされたものであった。しかしこの報告が当時、広く一般に受け入れられたかと、必ずしもそうではなかった。むしろ、それは多くの反論を呼起したのであった。その代表が、イングランド銀行の重役の一人であり、従ってこの銀行側に立ったボウズンキト (Charles Bosanquet) によってなされたものであろう。彼は、『地金委員会報告書に対する実際の観察』 (In Practical Observations on the Report of the Bullion Committee, 1810) を公けにし、リカードの『地金論』も地金委員会の『報告』も、全く理論的であり、現実的・実際的でない、と批判したのであった。これにリカードは、『ボウズンキト氏の「地金委員会報告書に対する実際の観察」への回答』 (Reply to Mr. Bosanquet's Practical Observations on the Report of the Bullion Committee, 1811) をもって応じた。ボウズンキトに劣らず実際問題にたけていたリカードは、今や同じ土俵の上で、ボウズンキトを徹底的に批判し、かつ彼の見解を退りぞけたのであった<sup>10)</sup>。

こうして「地金論争」へリカードが参加したことは、彼を理論家としてももちろん実際家としても、一段と有名にした。しかし、彼の知的発展という点から最も重要なことは、その論争への参加が、彼をマルサスと結びつけたということだ。教師でもあったマルサスは講義で通貨に関する問題について触れざるをえなかった。そこで、当時リカードの小冊子を手にした彼は、その問題に対する専門家リカードに、種々の助言を求める手紙を書いた。以後、これを契機にして二人の仲は急速に深まり、ここにリカードはミルにつぐ生涯の交友をもつに至ったのである<sup>11)</sup>。しかし彼らは、必ずしも研究の姿勢や見解を同じくしていたわけではない。否、それは全く異なっていた。

「リカードは合理主義者であり、マルサスは現実主義者・経験主義者であった。リカードにとっては、現実の世界は一般原理の世界であった。彼の洞察にすぐれた考えでは、およそ現実の世界にあるものはすべて、単純かつ秩序立っていた。〈事実〉は、それが正しく考えられた時、ここにいう秩序を例示する。大部分の人（とりわけマルサス）にとっての困難は、彼らが事実を正しく見ることができなかったという点にある。それは、彼らが事実を原理の光に照らし



て見なかったからである。他方マルサスは、あらゆるものを日常の光に照らして見た。彼は、リカードが分析を信じたように、観察や統計、歴史を信じた。マルサスが見い出したかったのは、事実が実際に保障するような一般化であり、知の世界をつくり出すような一般化ではなかった。事実を越えて権威をもつ唯一の〈原理〉とは、彼の考えでは、神学の原理のみであった。そしてこの神学が、彼——異常なまでに正直な人——を、多くの困難に会わせた。魂の平和を得るために彼は、苛酷な〈人口の原理〉といえ神の恩恵と一致するのだ、ということを証明しなければならなかった。彼は、差額地代を自然のけちくささの結果ではなく、自然のきまえのよさの結果だ、とみなさざるをえなかった。解放されたユダヤ人として偏見をもたなかったリカードには、そうした内部的に耐えなければならない葛藤はなかった。彼は論理上必要であれば、正しき善意の悲観主義者にさえなりえた。実際この二人は、経済学に対する信念、各々が真理と見たものに対する献身、批判に対する熱意、といったことを別にすれば、ほとんど似たところはなかったのである<sup>12)</sup>。

こうして、リカードとマルサスの研究姿勢や見解は全く異なっていたのである。しかし、だからといって、それが二人の交友関係を妨げるということは決してなかった。否、実情はむしろ逆であった。彼らはお互いの能力を高く評価し、かつお互いの見解に深い関心をだいていた。なお、彼らはお互い批判を得ることを心から望んでもいたのである。マルサスと出会って以後のリカードの出版物はすべて、それが印刷される前か後に、お互いの間で手紙を通じて議論された。単にそれだけではない。この二人の友人は折を見てはお互いに訪問しあい、そして議論をかわしたのであった。こうしてリカードとマルサスにあっては、彼らの研究姿勢や見解の違いが、お互いの経済学を拡大・深化させる刺激として、他にそうした例を見い出しえないほど、実に効果的に働いたのであった<sup>13)</sup>。

さて、リカードとマルサスが知りあった最初の3年間は、彼らを当初結びつけた通貨の問題が、依然として彼らの関心事であった。またこの問題について、彼らの間では再々手紙の交換がなされもした。それが今や彼らは、彼らの

関心を新しい問題に向けるに至った。これこそ、やがてスミス以来の生産を中心的な問題とした経済学のパースペクティブを大きく変え、新しい「類型」の経済学を生み出させることになった問題であった。リカードによれば、「利潤を支配する事情」というのが、その問題であった。これは一見、極めて抽象的な問題のように思えるが、すぐれて現実的な当時の政治の問題と深く関わっていたのである。すなわち、かの「穀物法論争」という形をとって現出した国民所得の分配の問題がそれであった<sup>14)</sup>。

産業革命と並進したイギリスでの農業革命は、農業生産力を増大させたが、しかし他方で見られた急速な人口の増加は、穀物需要を増加させた。こうしてイギリスでは、ナポレオン戦争に突入する以前から、すでに穀物を輸入しなければならぬ状態になっていた。この穀物輸入に対して地主階級は反対した。穀物の輸入は、穀物価格を引き下げ、ひいては地代を引き下げることになる、と考えたからである。ここに、当時の議会で力をもっていた地主階級は、1804年穀物法を施行させることによって穀物の輸入を抑圧し、彼らの利益の維持・増大を計ろうとした。しかし、ナポレオン戦争（1806-12年）への突入、とりわけこの過程でとられた大陸封鎖令は、その穀物法の発動をまつまでもなく、外国からの安価な穀物輸入を遮断させ、穀物高価の維持に貢献した。くわえて、1809、10、11年と引き続いた凶作があり、1812年の穀物価格は異常なまでの高さを示した。しかしナポレオン戦争の終結と1813年の豊作は、急激な穀物価格の低下をまねいた。ここに、大きな脅威と危機意識をだくに至った地主階級は、関税の引き上げを計るべく、穀物法の改正を議会に願い出た。これを受けてなされた1814年の『穀物法委員会報告』は、紆余曲折の後、1815年の新穀物法として結実したのであった。この法律は、穀物輸入に保護関税をかけることによって穀物価格の下落を阻止し、かくすることで穀物価格の高価を願う地主階級の利益の維持・増大を計ろうとするものであった。しかし他方、穀物価格の高価は高賃金につながり、ひいては利潤減少につながると考えた新興産業資本家階級は、その法律に真正面から反対したのであった。ここに、穀物法の賛否をめぐる議会で展開された論争が、いわゆる「穀物法論争」（1813-15

年)であった。従ってこの論争は、地主階級と新興産業資本家階級の利害の対立を浮き彫りにすることにもなり、それだけに激しく戦われたのである。要するにそれは、地代と利潤という国民所得の分配をめぐる、地主階級と新興産業資本家階級（ここでは労働者階級は関係のないものとされている）が議会で激しく戦った、一種の階級闘争に他ならなかった<sup>15)</sup>。

さて、そうした「穀物法論争」は、当時の多くの経済学者の関心を、これまで明白に分析されることのなかった一群の問題、とりわけ地代の問題に向けさせたのであった。このことは、1815年に、マルサスやリカード、ウェスト (Edward West)、トレنز (C. R. Torrens) らが、「地代を決定する原因」を等しく解明した一連の小冊子を公けにしていることから明らかである<sup>16)</sup>。もちろん、ここに見られる地代に関する彼らの見解は各々異なっていたのだが、収穫逓減の法則に基づいて、いわゆる差額地代論が説かれている点では同じであった<sup>17)</sup>。

ところで、それらの小冊子のいずれもが、それなりに注目に値するものである。しかし、その中でも最も注目に値するのは、やはりリカードの『穀物の低価が利潤に及ぼす影響についての一試論』 (An Essay on the Influence of a Low Prices of Corn on the Profits of Stock) ——以下すべて『利潤論』と略記する——であろう。これは、一週間たらずで書かれた20頁をわずかに越す小冊子ではあったが、「地代の原理を明らかにしているのみならず、分配の一般原理をも明らかにしたものであった」<sup>18)</sup>。要するに、リカードの主著・『原理』の骨子が、すでにここに描き出されているのだ。また、この『利潤論』でリカードが問題を取り扱うやり方は、彼が好んで用いたもう一つの研究方法を例示するものとして、恰好のものである。『利潤論』が極めて短い小冊子だということもあって、ここに見られる彼の研究方法は、彼の『原理』において提示されたそれよりも、ずっと明白なものなのである。

さて、『利潤論』におけるリカードは、彼の問題を単純化することをもって出発する。ここにいう彼の問題とは、「人口の増加と資本蓄積の増大（これがリカードの解する経済社会の進歩である）によって、利潤と地代となる分け前

に、いかなる変化がもたらされるのか、ということを示すことであった」<sup>19)</sup>。この問題を取り扱うのに、リカードは、暗示的・明示的に単純化を行った。その中でも論理的に重要だと思われるのが、次のそれである。

(1) 人口の増加と資本の一層の蓄積は、つまるところ耕作の拡大という結果をもたらす。

(2) この問題に関するその他のすべての要素は、不変なままである。すなわち、耕作方法には何も大きな変化は生じない。また、労働者は彼らが必要とする生活資料だけを受け取り、それ以上も以下も受けとらない。要するに実質賃金は不変なままである。なお、労働者が生活資料を土地以外の源泉から入手する可能性は考えない。

(3) 貨幣も考慮外におき、農業家によって投じられた資本、彼らが労働者に支払った賃金、彼らが受け取った利潤、彼らが地主に支払った地代、これらのすべては何クオーターかの小麦に還元されるものとする<sup>20)</sup>。

そうした単純化の後にリカードは地代の分析にとりかかる。その概要を示せば、こうであった。すなわち、「人口の増加と資本の蓄積は、実質賃金の不変性と共に、より多くの食料を得ることを必要ならしめる。この必要とされるより多くの食料は、耕作方法に変化のないことや輸入穀物高に変化のないことと結びついて、より多くの土地を用いることを必要ならしめるか、あるいは既に耕作されている土地をより集約的に用いることを必要ならしめる。かくして耕作されるようになる追加の土地は、肥沃度のより低いものとならざるをえない。というのも、そうでなければ、この土地は既に耕作されていたはずだからである。古い農場が集約的に耕作される場合、追加の支出は、投じられた資本の量や労働の量に比べて、より低い穀物の収穫をもたらすことになるであろう。耕作されたより肥沃度の低い土地には、いかなる地代も支払わない。この土地では従って、生産物は、労働者を雇用している農業者と労働者という単に二つの階級に分配されるだけである。実質賃金は不変なままであるから、その土地に生じた収穫の減少は、全く利潤にかぶさる。言葉を換えれば、人口の増加と資本蓄積の純結果は、後に限界地と呼ばれるようになった土地で得られる

生産物の分け前を、つまり資本家・雇主にわたる分け前を、減少させるということだ。(原文改行) 競争があらゆる用途の資本の収益を平均化するから、農業における収益率の低下——資本家・雇主農業者が受け取る生産物の分け前の減少——は、限界地から他のすべての土地と他のあらゆる産業へと拡大されるであろう。従って結論はこう述べることができる。すなわち、人口の増加と資本の蓄積は、ストックつまり資本の利潤の減少を引き起こすし、また利潤の減少には、限界地——これには地代は支払わない——の低利潤を越える地代の増加が伴う。耕作されたすべての土地の利潤を平均化する競争の意味するところは、優良耕作地で得られる収益と最劣等地の耕作地で得られるそれとの差がますます大きくなるということだ。また、この差こそが地代を形成する。従って、資本家つまり農業者にわたる所得の分け前は減少し、なお地主へわたる分け前は増加することになる」<sup>21)</sup>。

こうして今や地代の分析を通じて一応の結論に達したリカードであったが、彼はなお翻えてその分析の前提としていた若干の単純化を除去する。すなわち、貨幣は用いられない、耕作方法に変化はない、実質賃金は不変なままである、といった単純化を除去するのだ。そして彼は、これまで試みてきた地代の分析を今再び検討するのである。しかし、そうした後にも、彼は自分が先に試みた地代の分析から得た結論を修正するほどのことはない、と言うのであった<sup>22)</sup>。

とまれ以上、リカードの『利潤論』は、地代論を軸に三階級間の分配の問題を論じたものであった、と言えよう。そして、すでに述べたように、これは、当時の議会で穀物法の賛否をめぐる激しく戦われたかの論争と深く係わっていたのである。すなわち、『利潤論』において地代と利潤の対抗関係を明らかにしたリカードは、新興産業資本家の立場から、穀物法に反対したのであった。というのも、経済社会の進歩の「自然過程」としての利潤の下落は避けがたく仕方がないことだが、穀物の輸入を抑制することで、あえてその不幸な過程をもたらしたり速めたりすることは狂気のさただ、と解されたからであった<sup>23)</sup>。ちなみに、このリカードを批判し、地主の立場から穀物法を擁護したの

が、マルサスであった。彼は、穀物価格の騰貴は確かに地代の騰貴をまねくにしても、それはすべてのものの価格を高めることを通じて利潤を高めこそすれ、下落させることはない、と主張したのであった<sup>24)</sup>。とまれこうして、リカードの『利潤論』は、当時の議会で激しく戦われた、いわゆる「穀物法論争」と深く係わっていたのである。言葉を換えれば、地代論を軸に三階級間の分配の問題を論じたその小冊子は、「穀物法論争」という形をとって現出したまさに時代の問題を、つまり地主階級と資本家・労働者間における国民所得の分配という問題を、自らのそれとして受けとめたものであった。

さて、その『利潤論』を公刊した後のリカードの関心は、何よりも、それを体系的に仕上げることにあった。「リカードの手紙の示すところによれば、彼は、その小冊子が出版されてまもなくの間は、マルサスによる批判を受けたにもかかわらず、自分が下した一般的結論に十分な満足を感じていた。彼は、その結論は妥当かつ極めて重要だ、と確信していたのである。しかし残念なことに、彼はまた、その説明は成功にはほど遠いものだ、ということに気付いた。多くの人々が彼を誤解したし、またその誤解の多くは自分に責任がある、と思うと彼自らが言いもした。彼は、その議論を再加工することを、その問題を一段と範囲を広げてやり直すことを、また次の試みでは自分の分析をもっと容易に理解しえるようなやり方で述べることができないかどうか検討してみることが、心から望むようになった」<sup>25)</sup>。しかし、この彼の望みは、『利潤論』の公刊とほぼ時を同じくして生じた公的な出来事によって、二度ほど中断されざるをえなくなった。

その最初の中断は、株式取引所でのリカードの仕事から生じた。1814年エルバ島への追放によってナポレオンが退位した時、彼は、ロンドンでの株式取引の仕事から隠退する準備を始めていた。ナポレオンの退位によってみた戦争の終結は、政府公債の価格を著しく騰貴させた。この多くの公債を有していたリカードは、それを売って土地に投資し始めた。そうすることで彼は株式取引の仕事から隠退しようとしたわけである。ところが、1815年2月エルバ島から脱出したナポレオンのフランスへの復帰は、再び戦争を引き起こし、政府公債に

今また急激な変動をもたらした。そこでリカードはまた、株式取引所での仕事に専念したのであった。こうして彼は、自分が思いもしなかったほどの巨大な利益を得たのであった。二度目の戦争が終結するや、再び株式取引の仕事から隠退する計画を立てた彼は、そうして得た富の大半を土地に投資し、今や大地主となった。大地主となった後にも彼は、穀物法に反対するという今の彼には不利な立場を、みじんも変えることはなかった。彼は、自らがこれまで主張してきた理論に、まさに忠実であったわけである<sup>26)</sup>。

とまれ、1815年の終りになると、リカードは、『利潤論』を体系的に仕上げるための自由を得た。しかし、ここでもまた彼は、二度目の中断をよぎなくされた。それは、彼の友人でもあり、地金委員会の一人でもあったグレンフェル(P. Grenfell)から、通貨問題に関する助言を求められたからであった。こうしてリカードは、「地金論争」の延長線としての「通貨論争」に係わり、『経済的にして安全な通貨に関する諸提唱』(Proposals for an Economical and Secure Currency, 1816)を書いたのであった。これは、安全な通貨としての平価による金兌換への復帰と、金地金本位制度を、積極的に主張したものであった。この小冊子を公けにするや直ちに、リカードは、『利潤論』公刊以来の彼の願いであったそれを体系的に仕上げるという仕事にかかった。それは、彼のマルサスあての手紙が示しているように、「地代と利潤・賃金」に関する問題を、より詳しく解明することであった。この仕事に今や彼は何ら中断することなく専念することができた。もっとも、彼の来客に対する心からの接待にくわえて、彼の遅筆という妨げはあったのだが<sup>27)</sup>。

さて、『利潤論』を体系的に仕上げるというリカードの作業には、それなりの困難が伴った。「彼は、分配というシンプルな問題を論議する前に、この議論の基礎になっている価値の概念に関する自分の考えを明白にしなければならない、ということに気付いた。『原理』の冒頭の章や、この書物全体の他のあちこちの章が、価値に関する叙述を明白にしようとする彼の試みに捧げられているのは、その結果である……(原文改行)彼はまた、その書物を執筆している間に、スミスやマルサス……セーを再読することが賢明である、と判断した。

彼はまた、ブキャナン (Buchanan) が『国富論』を編集するに当って準備したノートも読んだ。しかし明らかにリカードは、少くとも彼の手紙を見る限り、何らかの資料を集めたり、経済行動に関して何らかの観察をくわえたり、何らかの統計を集めたり、何らかの政府資料を読んだりすることが必要だ、とは考えなかった……今や彼がなそうと努めたことは、価値に関する彼の理論的概念を精緻化することであり、他の理論家達がこの問題について述べてきたことを検討してみることであった」<sup>28)</sup>。とまれこうして、『利潤論』を体系的に仕上げるという困難な作業を、リカードは、1817年の初頭に終えたのである。彼の代表作・『原理』の誕生である。かくしてここに、生産を中心的な問題としたスミス以来の経済学に代る価値—分配を中心的な問題とする新しい「類型」の経済学が、生み出されたのであった。単にそれだけではない。すでに述べたように、このリカードの『原理』は、以後60年から80年も続いた古典・新古典派経済学に、一種の枠組を与えるものであった。

その『原理』完成後のリカードの歩みは、彼の死に至るまで続いた政治家としての活躍をもって特徴づけられる。しかし、だからといって、経済学や経済問題に対する彼の関心が、薄れてしまったというのではない。政治家の活動と平行して、彼は、なおも経済学者として経済に関する時論的・理論的研究を続けた。そしてまた彼は、しかるべき著作や論文を公けにもしているのである。もっとも『原理』公刊以後の彼の著作や論文は、「体系的な学説に寄与したものではなくて、時論的な問題に対して政治家として議論したもの」<sup>29)</sup>が、その大部分を占めているのだが。

さて、『原理』の原稿を印刷所にまわすや、リカードは、家族をつれて初めての大陸旅行に出た。この旅から帰るや、オーエン (R. Owen) の「貧民の雇用と改善」のための計画の実行可能性を検討するための委員会への入会を求められて、彼は1819年にその一員となった。その間の1818年に彼は、グロータースという地方——ここに彼は広大な土地と邸宅を有していた——の郡執政長官に任命された。これは、当時としては相当に社会的名声を伴う役職であった。今や彼は、ユダヤ人出身者であったにもかかわらず、地方の指導的大地主とな



ったのである。こうした中で、1814年以來のミルの勧めもあって下院に議席を得ることを願っていたリカードの議員生活のスタートは、切られた。時に1819年のことであった。以來彼は、死に至るまで議員として活躍した。彼は自分の選挙区を訪ずれるという労を一度もとらなかったが、しかし議員としての彼の職務を決してかまけたりはしなかった<sup>30)</sup>。

「議会でのリカードはといえば、できる限り正規の手続きにそって、かつ最も効果的に彼の職務を果した。彼は自分の事業や経済学の発展に注いだのと同様の多くの精力を、議会での職務にも注いだ。彼は議会期の間には必ず自分の議席にいた。彼は、見るからに有能な演説家であり、また再々そうであった。種々の当時の報告は、彼の経済問題の討議に、人々が注意して聞き入ったことを証している。彼はまた、明らかに経済的色調を有する問題に対しては、リベラルな立場をとった。彼は、普通選挙法の改正を求めて戦い、大部分の人々に選挙権を与えようとした。彼は、カソリックの解放運動の側に立った。当時のカソリック教徒は公務につくことを妨げられていたのである。彼は、出版の自由と公集会の権利を擁護した。またおそらく彼は、戦債を減らすために財産税を課すことを国家に向けて力説したその法外な精力の故に、他の誰にもまして著名であった。彼は、そのような課税が戦債を全滅ないし大いに減少させるにちがいない、と熱心に考えていたのである。そうした財産税が施行された場合、彼はそれによって最も痛みつけられる者の一人となるのであったが、そうした方策・課税を彼は大いに精神的に弁護したのであった。言葉を換えれば、議会でのリカードはラデカル中のラデカルであり、当時は極めて不評判であった種々の方策の側に身を置いていた」<sup>31)</sup>。

晩年のリカードはこうして、議員としての彼の職務に情熱をもって励んだのであるが、しかし彼の経済学に対する関心はなお依然として強く、マルサスとの手紙による論争も続けられた。とりわけ1821年のマルサスにあてた彼の手紙では、「価値尺度の問題」が論じられた。そして、この問題について両者間になされた議論は、リカードの死に至るまで続けられたのである。またリカードは、彼の死後ミル (John Sturert Mill) が登場するまで正統派経済学のチャン

ピオンとみなされ、彼の経済学の普及に一役かったといわれているマカロック (McCulloch) とともに、文通による意見の交換を行った。なお付言すれば、彼は経済学に関心をもつ人々を招待して定期的デナー・パーティを開いた。この延長として、1821年にかの有名な「経済学クラブ」は生れたのである。こうして経済学の普及にも努めるかたわら、彼はまた、彼の主著・『原理』の改訂にも着手したのであった<sup>32)</sup>。

「リカードは出版社に勧められて、『原理』の新版を1819年と1821年に公刊した。そして、この各々の版において彼は、主として価値に関して一定の変更をくわえた。その多くは彼の名誉にかかわることであったが、第三版において彼は、第一版で表明はしたが批判にもちこたえないと考えるようになっていた見解——機械の採用が賃金獲得者の経済的福祉に及ぼす影響に関する学説——を否定したのであった。＜彼の特徴である科学上の公平さと真理への愛＞をもって、彼は、機械の導入が労働者階級を害することは決してないという自分の想定は誤りであった、と認めた……（原文改行）しかし彼がなしたそうした変更は、二次的・副次的なものにすぎなかった。彼は時間をかけて、一全体としての自らの理論を徹底的に再構成するということを、何かしようとはしなかった」<sup>33)</sup>。

とまれ、その『原理』の改訂にくわえて、リカードは、経済の問題に関する時論的論文や小冊子を公けにした。1820年に彼は、議会で自らが述べた見解をとりまとめて、論文・「減価基金」(Funding System)を出した。これは、公債償却のための減価基金が悪要され、本来の目的から離れてしまっている点をつかんとしたものであった。1822年に彼は、『農業保護論』(On Protection of Agriculture) という小冊子を公けにし、穀物法による農業保護に反対し、この法の撤廃を求めた。なお彼の死の一カ月前のことであるが、彼は、『国立銀行設置のための計画』(Plan for the Establishment of National Bank) を書いている。「地金論争」以来の主張をくり返し、発券業務を一私的機関であるイングランド銀行から国立銀行へ移管すべきだと主張した、そのリカードの原稿は、彼の死後公けにされた。リカードの死は突然やってきた。さきほどのこと

はないと思われていた頭部の潰瘍の結果、1823年9月に彼はこの世を去った。時に51才であった<sup>34)</sup>。

以上、極めて長くなったが、ミッチェルが実に詳しく試みていたリカードの伝記的叙述に関する部分の概要を見てきた。しかし、この概要の検討は、小稿の「あとがき」に委ねることにして、なおミッチェルの論述をたどっていくことにしたい。ミッチェルは、リカードの伝記的叙述に続ける形で、リカードの『原理』の要約・検討を試みているのである。否、より正確に言えば、『原理』公刊までのリカードの歩みをたどってきたミッチェルは、ここでなすべき『原理』の要約・検討を後まわしにするという形で、またそうする旨のことを述べて、『原理』公刊以後のリカードの歩みをたどっているのである。こうしてリカードの生涯をたどり終えた今や、ミッチェルは、先に約束した『原理』の要約・検討を試みるのである。以下、節を新ためてその概要を見ていきたい。

#### ＜注＞

- 1) Wesley C. Mitchell, *Types of Economic Theory—From Mercantilism to Institutionalism*, New York, Augustus M. Kelley Publishers, 1969, Vol. I, P. 261.
- 2) Ibid., Vol. I, p. 263.
- 3) Ibid., Vol. I, p. 285.
- 4) Ibid., Vol. I, pp. 263–264.
- 5) Ibid., Vol. I, pp. 265–266.
- 6) Ibid., Vol. I, pp. 266–267.
- 7) Ibid., Vol. I, p. 267.
- 8) Ibid., Vol. I, pp. 267–268.
- 9) Ibid., Vol. I, pp. 268–271.
- 10) Ibid., Vol. I, pp. 271–274.
- 11) Ibid., Vol. I, p. 274.
- 12) Ibid., Vol. I, p. 275.
- 13) Ibid., Vol. I, pp. 275–276.
- 14) Ibid., Vol. I, pp. 276–277.
- 15) Ibid., Vol. I, pp. 277–281.
- 16) ここにミッチェルが挙げている小冊子の表題については、Ibid., Vol. I, pp. 281–283の参照を乞う。
- 17) Ibid., Vol. I, pp. 281–285.
- 18) Ibid., Vol. I, p. 285.
- 19) Ibid., Vol. I, p. 288.
- 20) Ibid., Vol. I, p. 288.
- 21) Ibid., Vol. I, pp. 288–289.
- 22) Ibid., Vol. I, pp. 289–293.
- 23) Ibid., Vol. I, p. 293.

24) リカードは、経済社会の「自然的過程」を、こう解していた。資本蓄積の増大・人口の増加（経済社会の進歩）→限界地低下→穀物価格の騰貴→地代・賃金の騰貴→利潤下落→資本蓄積の低下・人口の減少（経済社会の衰退）。とすれば、穀物輸入の抑制によって穀物価格を騰貴させることは、人為的にこの過程を速めることになる、と解されよう。故にリカードは、穀物輸入の抑制に反対し、その自由な輸入を主張したのであった。他方マルサスは、こう解していた。穀物の自由輸入（抑制）→地代・賃金の下落（上昇）→生産物価格下落（上昇）→利潤下落（上昇）経済社会の衰退（進歩）。故にマルサスは、穀物の自由輸入に反対し、その輸入の抑制を主張したのであった。要するに、地代・賃金の騰貴は生産物価値・価格を高めると解したマルサスに対して、リカードは、地代・賃金の騰貴は生産物価値・価格に影響しないと解していたのである。かくして、リカードとマルサスの違いは、つまるところ両者の価値規定をめぐる見解の違いに帰着することになる。『利潤論』公刊後、マルサスの批判を受けたリカードが、何よりも彼の価値論を明白にするという作業に取りかかった所以である。ちなみに、支配労働価値論・構成価値論に依拠していたマルサスに対して、リカードは、投下労働価値論・分解価値論に依拠することを明白にし、彼の『利潤論』の体系的完成に努めた、と言われている。なお、ミッチェルのマルサス論については、佐々木晃『制度主義者たちと古典派経済理論』（東洋経済新報社、昭和57年4月、133-150頁）に詳しいので、その参照を乞う。

25) Ibid., Vol. I, p.295.

26) Ibid., Vol. I, pp.295-296.

27) Ibid., Vol. I, pp.296-297.

28) Ibid., Vol. I, p.297. ここでミッチェルは、リカードの『利潤論』から『原理』への歩みが、価値論の定成による三階級間三分配論の完成への努力に他ならなかったことを指摘している、と解してよいであろう。もっとも、この点へのより立ち入った叙述を、ミッチェルに見出すことはできない。真実氏によれば、どちらかといえば地代・利潤の相関関係論に力点のあった『利潤論』の分配論が、価値論つまり投下労働価値論・分解価値論の明確化とともに、地代を割り込み部分として排除し、賃金と利潤のみを真の分解分と指定する賃金・利潤の相関関係論に編成し直されるようになった。ここに投下労働価値論を基礎におく三階級間三分配論、つまり『原理』完成への道が軌道にのったのである（真実一男『リカード経済学入門』新評論、1975年5月、56頁）。

29) Ibid., Vol. I, p.305.

30) Ibid., Vol. I, pp.298-299.

31) Ibid., Vol. I, p.299.

32) Ibid., Vol. I, pp.300-302.

33) Ibid., Vol. I, pp.302-303.

34) Ibid., Vol. I, pp.303-305.